だるまさんがころんだ

作・演出○坂手洋二

〔 2004年度 受賞 〕

読売演劇大賞〈選考委員特別賞・優秀演出家賞〉
鶴屋南北戯曲賞 ／ 朝日舞台芸術賞 舞台芸術賞
「シアターアーツ」誌 ベスト舞台・ベストアーティスト

私ども燐光群は、この夏『だるまさんがころんだ』の5度目の公演を行う予定がございます。つきましては、本公演をぜひ頂きたく、ご案内を送らせて頂きました。

江東区文化センター(8/19～21 東京)、吹田市文化会館メイシアター(9/8・9 大阪)、国内ツアーに加え、ブカレスト(ルーマニア)フランクフルト(ドイツ)・トビリシ(ジョージア:旧グルジア)での海外公演も予定しております。

本作は2004年2月に初演し、5ヶ月後に追加公演・全国ツアーを展開、同年いくつもの演劇賞を受賞し、その後も'05年・'08年に再演するなど、高い評価を頂いている作品です。

どうぞよろしくお願い申し上げます。

燐光群 (有)グッドフェローズ
rinkogun@alles.or.jp ☎03-3426-6294 FAX 03-3426-6594
http://rinkogun.com/ 〒154-0022 世田谷区梅丘1-24-14 フリート梅丘202

「二人の自衛官」

「セントラルパークの地雷」

「義足の女」

「家族」

2004年2月、燐光群は坂手洋二の書き下ろし新作『だるまさんがころんだ』を発表、「イラク戦争の現実に拮抗する日本唯一の演劇表現」として高い評価を得ると同時に、各方面に圧倒的反響を呼び起こしました。さらに、全国各地からの熱望の声に応え、同年7月から、東京での追加公演を皮切りに、岡谷・伊丹・名古屋・浜松・足利・仙台で上演、各誌・紙においても激賞され、各賞を受賞しました。翌2005年には、東京、うるま市(沖縄)、横浜市にて、2008年にも再び東京で上演しています。

2003年、アメリカを中心とした国々のイラクへの進攻が始まり、後方支援とはいいながら戦地への自衛隊「派兵」が現実になって以来、改めて日本が「戦争」にどのように向き合うかが問われることとなりました。『だるまさんがころんだ』は、こうした状況に向き合い、＜ラディカル＞さと＜ポップ＞さを併せ持ち、同時に豊かな演劇性を湛えた独自の世界を生みだしました。
燐光群は1995年、自衛隊に所属しながら戦争に反対する運動をしている実在の自衛官たちに取材した『反戦自衛官』を発表。1990年には湾岸危機を背景にした『レフトハンド・マシーン』も手がけています。最近の『CVR チャーリー・ビクター・ロミオ』『ララミー・プロジェクト』といった「ドキュドラマ」上演の成果も踏まえ、そうした「現実を切り取る腕力」と、『屋根裏』に代表される「演劇の多様性・エンターテイメント性の追究」が調和した、新たな表現世界が拓かれました。
坂手洋二は、2001年より日本劇作家協会・国際交流基金等によるアジア9ヶ国の演劇人による「地雷」プロジェクトに参加しています。2001年7月にシンガポールで行われた合宿では、「地雷」をテーマにした作品の競作・提出が行われ、その中で坂手は、本作『だるまさんがころんだ』のテキストの一部にもなっている『セントラルパークの地雷』を発表しました。このプロジェクトの経験を生かし、坂手は本作品で「地雷」「兵器」「戦争」を全く新しい視点から描きだしています。

日本は2007年2月のクラスター爆弾禁止会議参加国の中で、「第二の地雷」とされるクラスター爆弾の保持を禁ずる「オスロ宣言」を支持していませんでした。その後、'09年7月にオスロ条約(クラスター爆弾禁止条約)を批准しましたが、世界的に今なお広がる地雷の被害を前に、この劇の持つ先進性と意義が、改めて注目されています。

なお、2009年7月に劇団青羽により『だるまさんがころんだ』(改題「ムクゲの花が咲きました」)としてソウルで上演され、好評を博しています(キム・カンボ演出)。

第8回鶴屋南北戯曲賞　選考委員選評より

山口宏子　朝日新聞社

小劇場の濃密な空間で上演された「だるまさんがころんだ」は、われわれの一見平穏な生活が戦場と地続きであることを、改めて実感させた。テーマは「地雷」。海外に派遣された自衛隊員、地雷除去に携わる女性とヤクザの交流、この武器を製造する日本の会社員とその家庭、故郷を追われたアジアの民……。複数の物語の断片をテンポよくつなぎ、喜劇性も加味した戯曲は、重い主題を身近にし、考える材料を鋭く突きつける。坂手洋二さんの個性と実力が発揮され、実に刺激的な作品になった。自衛隊が、戦争をしている国に初めて派遣された2004年。大きな曲がり角にさしかかったこの時代を鮮やかに映した、秀作だ。

石山俊彦　共同通信社

坂手さん独特のオムニバス形式で各場面が有機的に展開する中で、子供の遊びが持つ無邪気でユーモラスなイメージを、対人地雷の怖ろしさに結びつけ、観客の想像力を刺激した。犠牲者の思いが夢幻能のように立ち上ってくる。メッセージ性がストレートに出すぎると、見るものの想像力を殺いでしまうこともあるのだが、この作品は演劇的手法を見事に生かしている。

竹島勇　中日新聞東京本社

「自分」の立つ位置が問われている ── 観る者にそんな思いを感じさせる舞台を作り続けているのが坂手洋二だ。
「だるまさんがころんだ」は「地雷」が日本人にとって、いや観る者が「自分」にとってかかわり深いものと感じられるよう趣向が凝らされている。「オムニバス」「時事的情報」「笑いのバランス」などが、誰もが知る子供の遊びのフレーズとともに効果的に劇イメージを増幅させた。

内田洋一　日本経済新聞社

現代の危うい虚実の皮膜を演劇という鋭利なメディアで刺し貫く試みだった。地雷をめぐる挿話をつなぐことで、黒い笑いを帯びた悪夢の世界へと観客を突き落とした。登場者の多くは幽霊のような存在であり、出来事は彼岸と此岸のあわいに浮かぶ蜃気楼のように浮かんでは消える。一瞬の転換で残像の尾をひきながら、映像よりはるかに生々しい身体感覚、そのうずきを観客に知覚させた。今の日本人の網膜はまさにこうした虚実のあわいにあると思わせられたのだった。長く語り継がれる作品となるだろう。

河村常雄　読売新聞社

この作品は、地雷の非人間性を訴えるテーマを露骨に提示することなく、地雷製造メーカーの社員や家族、やくざ、地雷除去活動家、自衛隊などのエピソードを笑いをまじえながら積み重ね、テンポよく核心に迫った。小津映画を彷彿とさせる鴨川てんしの快演も、印象に残る。

高橋豊　毎日新聞社

2004年は、新作の創作劇の上演が目立たなかった年という印象が強い。その中で、ず抜けていたのが、燐光群の坂手洋二作「だるまさんがころんだ」である。
地雷に象徴される世界の政治構造を、オムニバス形式でえぐり出しているのだが、ブラックユーモアに包んで笑いから迫っているのがいい。幾つもの話が進行しながら、背後にある巨大な存在が浮かび上がってくる。
地雷や不発弾が転がる荒野で、派遣自衛隊員たちが「だるまさんがころんだ」に興ずる出だしから、ぐいぐい観客を引っ張って行く。NYのセントラルパークに地雷が設置されていたらという「幕間狂言」が、「9・11」事件前に書かれたことも特筆したい。
幕切れになって、登場人物たちが実はすべてあの世の死者なのではないか、と思えてくる。燐光群の俳優陣のアンサンブルも見事だった。

2004年 朝日舞台芸術賞 舞台芸術賞 受賞コメント

燐光群で発表した新作『だるまさんがころんだ』『私たちの戦争』『ときはなたれて』を対象として坂手洋二が受賞。

本日は燐光群『屋根裏』アメリカツアーのためスタッフとともにピッツバーグへ先乗りしており、この場に馳せ参じることができないことをお詫びいたします。
朝日舞台芸術賞をいただいたことは、私にとって大きな喜びでした。
その理由は、私の劇団である燐光群で2004年に私が戯曲あるいは演出、美術を手がけた作品のすべてを受賞の対象としてくださったことです。
燐光群は今年で創設23年目となります。
もともと演劇というモノに対して斜に構えていた私にとって、演劇よりも先に劇団という存在があることが、つねに創作の原動力でした。
気がつけば私たちの同時代の小劇団の多くは解散し、あるいは形態を変えてしまい、集団による想像力をたいせつに考える在野の小さな劇団はほとんど姿を消してしまいました。
私たちも、いつまでこのような形で活動を継続できるか知れません。
しかしこうして仲間と共に2004年という時代を生きたことの全体性を評価していただいたことにより、時代遅れに見えるかもしれない、また、アマチュアとプロの境目も曖昧な、どろくさい劇団の作業を続けていく勇気とエネルギーが湧いてきます。
私たちには演劇が必要です。
演劇を使って感じ、考える習慣が、私たちに生きる糧を与えてくれています。

『だるまさんがころんだ』は、私たちにとって、確実に、このような劇を上演するために私たちは演劇を続けてきたのだという手応えを得られる作品でした。
私たちがこの劇を作りはじめたころ、アメリカの理不尽な「開戦」により、「第二の地雷」と呼ぶべきクラスターの不発弾が散らばるイラクへ、日本の自衛隊員たちが「派遣」されたのです。
私たちは、自分たちが生きている間には地球上に存在する対人・対戦車地雷を完全に撤去することは不可能であるという現実に対して、私たちが発狂せずにいるためには、それが演劇であれ、別な手段であれ、人間と人間が信頼しあい、お互いを大切にするという以外に方法がないことを痛感しました。
斎藤憐さん、ジョン・ロメリルさん、そして今はなきクォ・パオクンさん、志摩真実さん、その他多くの「ランドマイン・プロジェクト」に携わってきた日本、オーストラリア、アジアの仲間たちに、心から感謝いたします。(中略)

「地雷商人」

私たちがこうした三本の作品を発表した後も世界の情勢は、臆面もなく、恥ずかしげもない退廃の一途をたどっています。
イラクにはまだ自衛隊がいます。
イラクで、パレスチナで、理不尽な虐殺が続いています。
こうした現実に対し異議を唱える勇気を持てなければ、私たちは表現者たり得るでしょうか。
たった一つのコトバ、わずかなまなざしの変化が相手に伝わると信じなければ、生きていくことができるでしょうか。

皆様のご支援に、心から感謝します。
坂手洋二

（有）グッドフェローズ　☎ 03-3426-6294　FAX 03-3426-6594　rinkogun@alles.or.jp
http://rinkogun.com/　〒154-0022 世田谷区梅丘1-24-14 フリート梅丘202

【 燐光群　近年の活動 】

1983年創立。主宰である坂手洋二の作・演出作品を中心に、社会性・実験性の高さと、豊かな表現力を兼ね備えた、斬新で意欲的な新作公演を重ねている。国内での年3～5本の公演・ツアーの他、『神々の国の首都』『屋根裏』等で海外11カ国18　都市の公演を行う。1999年『天皇と接吻』第7回読売演劇大賞優秀作品賞、2002年『最後の一人までが全体である』第10回読売演劇大賞優秀作品賞、2004年『だるまさんがころんだ』第12 回読売演劇大賞選考委員特別賞。

1983年　創立。以来、東京・国内地方・海外での公演を年4～7本程度継続して実施
1994年・1996年『神々の国の首都』二度に渡るヨーロッパ・ツアー
1998年　『神々の国の首都』アメリカ・ツアー
1999年　アメリカから3名の俳優を招き『天皇と接吻』を上演（第7回読売演劇大賞優秀作品賞受賞）
2000年　海外から9名の俳優を招いての国際共同製作『南洋くじら部隊』を東京・沖縄にて上演（国際交流基金共催）
2001年　『ブレスレス1990　ゴミ袋を呼吸する夜の物語』ヨーロッパ・ツアー
2002年　『最後の一人までが全体である』にて第10回読売演劇大賞優秀作品賞受賞
2003年　燐光群+グッドフェローズ プロデュース『CVR　チャーリー・ビクター・ロミオ』全国14都市ツアー
2004年　『だるまさんがころんだ』全国7都市ツアー（第12回読売演劇大賞選考委員特別賞受賞）
2005年　『屋根裏』アメリカ及び国内ツアー／『上演されなかった「三人姉妹」』紀伊國屋ホール他
　　『パーマネント・ウェイ』シアタートラム／『スタッフ・ハプンズ』ザ・スズナリ他
2006年　『チェックポイント黒点島』ザ・スズナリ開場25周年記念・ロングラン公演及び国内ツアー
2007年　『フィリピン ベッドタイム ストーリーズ』森下スタジオ・アイホール及びフィリピン・ツアー
　　『ワールド・トレード・センター』燐光群創立25周年記念公演　ザ・スズナリ等全国7都市ツアー
08～09年『屋根裏』パリ・フランクフルト・ウィーン・ブカレスト・東京公演
2010年　『アイ・アム・マイ・オウン・ワイフ』『ザ・パワー・オブ・イエス』『現代能楽集 チェーホフ』『3分間の女の一生』を上演。

【 坂手洋二 略歴 】近年は劇団外での仕事を中心に記載してあります

劇作家・演出家。燐光群主宰。1983年燐光群旗揚げ。『屋根裏』『だるまさんがころんだ』等により、岸田國士戯曲賞、鶴屋南北戯曲賞、読売文学賞、紀伊國屋演劇賞、朝日舞台芸術賞、読売演劇大賞最優秀演出家賞を受賞。戯曲は海外で10以上の言語に翻訳され、出版・上演されている。今後『上演されなかった「三人姉妹」』も海外で上演される予定。
日本劇作家協会会長。日本演出者協会理事。国際演劇協会日本支部理事。

1983年　燐光群旗揚げ
1991年　第35回岸田國士戯曲賞を受賞（燐光群公演『ブレスレス ゴミ袋を呼吸する夜の物語』）
1998年　『くじらの墓標』がロンドン・ゲートシアターのレパートリーとしてイギリスのスタッフ・キャストにより上演される
　　※同戯曲は英語・ロシア語・ポーランド語に翻訳されている
1999年　第7回読売演劇大賞最優秀演出家賞を受賞（燐光群公演『天皇と接吻』）
2002年　第37回紀伊國屋演劇賞個人賞を受賞
　　第54回読売文学賞を受賞（燐光群公演『屋根裏』）
　　第10回読売演劇大賞最優秀演出家賞を受賞（『CVR　チャーリー・ビクター・ロミオ』、燐光群公演『屋根裏』『最後の一人までが全体である』『阿部定と睦夫』4作品に対して）
2003年　新国立劇場『マッチ売りの少女』（作＝別役実）の演出を担当
　　燐光群『象』（作＝別役実）を演出／地人会『心と意志』書き下ろし・演出
2004年　燐光群『だるまさんがころんだ』書き下ろし・演出（第8回鶴屋南北戯曲賞・第12回読売演劇大賞優秀演出家賞を受賞）
　　第4回朝日舞台芸術賞 舞台芸術賞を受賞
2005年　まつもと市民芸術館『いとこ同志』書き下ろし・演出
　　自転車キンクリートSTORE『ウィンズロウ・ボーイ』演出／『セパレート・テーブルズ』出演
　　岡山県文化特別顕彰
2006年　オーストラリア国立演劇学校に招かれ現地スタッフ・キャストによる『屋根裏』（THE ATTIC）演出
　　※同戯曲は英語・フランス語・ドイツ語・イタリア語・韓国語に翻訳されている
2007年　文化庁・文化交流使としてニューヨーク、パリ、ベルリンを歴訪
　　The Play Company により『The Attic』（屋根裏）がオフ・ブロードウェイにて上演される
　　ホリプロ企画『エレンディラ』脚本（演出＝蜷川幸雄　作曲＝マイケル・ナイマン）
2008年　サヌリム劇場（ソウル）にて『ブラインド・タッチ』が一ヶ月に渡り上演される。
　　劇団俳優座『スペース・ターミナル・ケア』書き下ろし（演出＝栗山民也）。
2009年　アルコ芸術劇場（ソウル）で現地キャスト・スタッフによる『屋根裏』演出。同劇場では劇団青羽により『だるまさんがころんだ』が上演される。
2010年　俳優座劇場プロデュース『兵器のある風景』演出。
　　フランス（パリ・グルノーブル）で現地キャスト・スタッフによる『Le Grenier（屋根裏）』が上演される。
　　『たたかう女』が韓国で上演される。
2011年　劇団民藝へ『帰還』書き下ろし。

◎戯曲集
ハヤカワ演劇文庫『坂手洋二 I』（「屋根裏」「みみず」所収）
ハヤカワ演劇文庫『坂手洋二 II』（沖縄三部作「海の沸点」「沖縄ミルクプラントの最后」「ピカドン・キジムナー」所収）
『いとこ同志』『屋根裏／みみず』『天皇と接吻』『だるまさんがころんだ』『くじらの墓標』『ブレスレス／カムアウト』
『最後の一人までが全体である／ブラインド・タッチ』『トーキョー裁判／危険な話』『火の起源』『青空のある限り』
◎評論集　『私たちはこうして二十世紀を越えた』